個の自由
全体の調和

－変化に富んだ良好な街並み景観－

（目的）

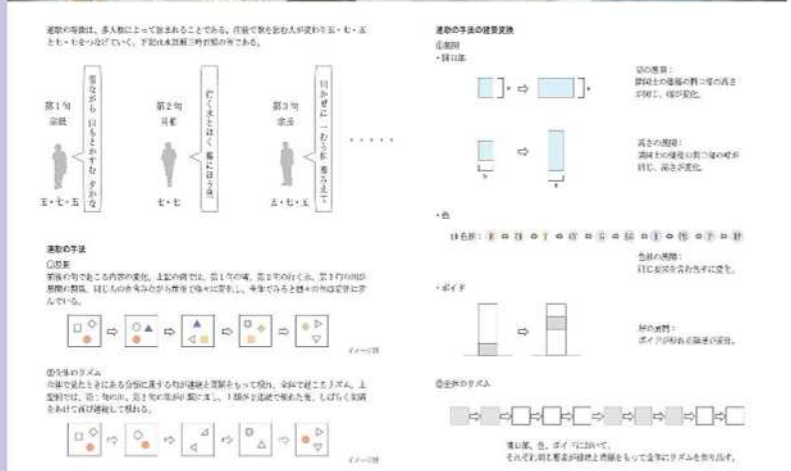
街並み景観は個々の建築の集合体であり、良好な景観を形成するために個々の建築デザインの全体での調和が必要となる。良好な景観を形成するためとして、個々の建築デザインに規制が加えられることが挙げられる。しかし、規制が厳しくなりすぎると、個々の建築デザインが画一的になり、個々の建築のデザインは単調化してしまう。規制緩和により良好な景観を形成することも必要である。個々に個性がある自由なデザインでありながら変化に富んだ全体の調和に及ぼす影響を考慮する仕方のある設計手法の提案をしたい。卒業設計は、個別に設計手法により変化に富んだ良好な街並み景観の可能性を見出すことを目的に行った。

（設計手法の提案）

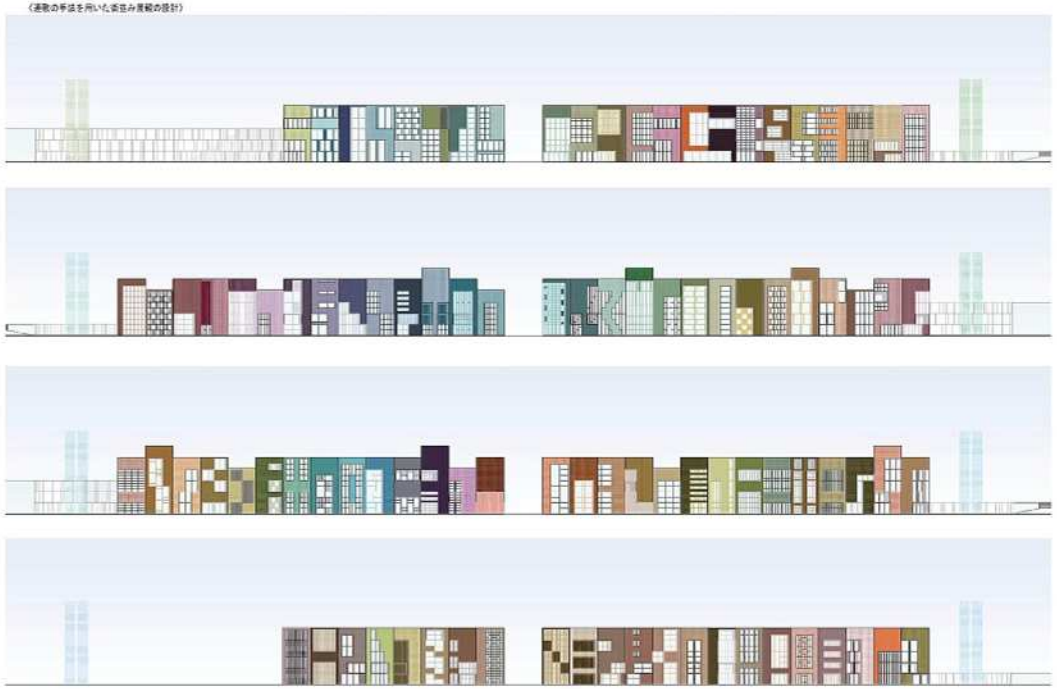
景観形成には、隣接する建物が重要だと考える。個々の建物がより自由なデザインでありながら変化に富んだ良好な景観を形成するために、「繰り返し」と「全体の調和」を考慮した設計手法を提案したい。設計手法の提案として、個々の「句」または「句の集まり」を「句」と名付ける。「句」とは、「隣同士の建物に関係性を持たせて設計すること」を意味する。「句」とは、「句」の中に、複数の句が集まるような、可能性が秘められていることである。「句」の集まりは、個々の建物によって異なる多様な表現に自由にあてはめられ、また「句」の集まりは、「句」の集まりとなり、全体の「句」を形成する。これを建築に置き換えると、ある要素が隣接する建物で「繰り返し」されることにより、「全体のリズム」を作ることが可能となり、「句」は「リズム」の役割を担う。

（事例）

今実施されている、個々の建築がより自由なデザインでありながら変化に富んだ良好な街並み景観を形成するためのデザインルールとして、ボルネオ・スポレンブルク島の「街並み景観ガイドライン」を取り上げた。建築の手法を用いることにより、個々の建築デザインは自由でありながら変化に富んだ良好な街並み景観の可能性があるという結果に至っている。



〈連歌の手法を用いた街並み景観の設計〉



（1）研究旅行のテーマ

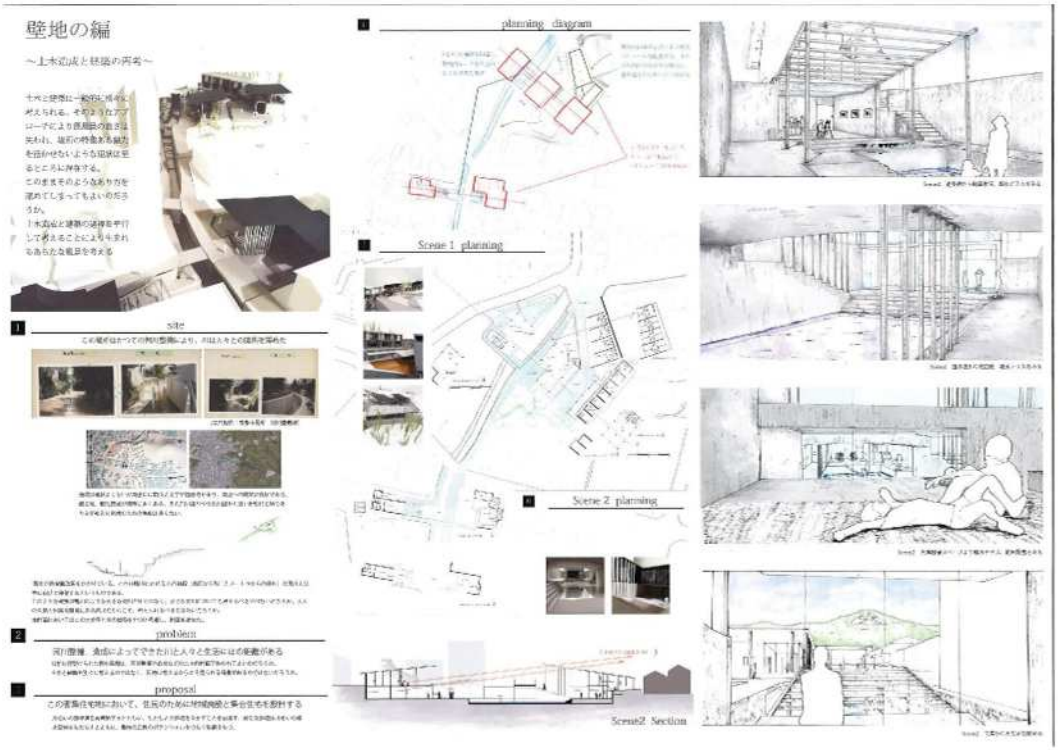
「ヨーロッパの街並み分析による連歌の手法の信憑性の確立」

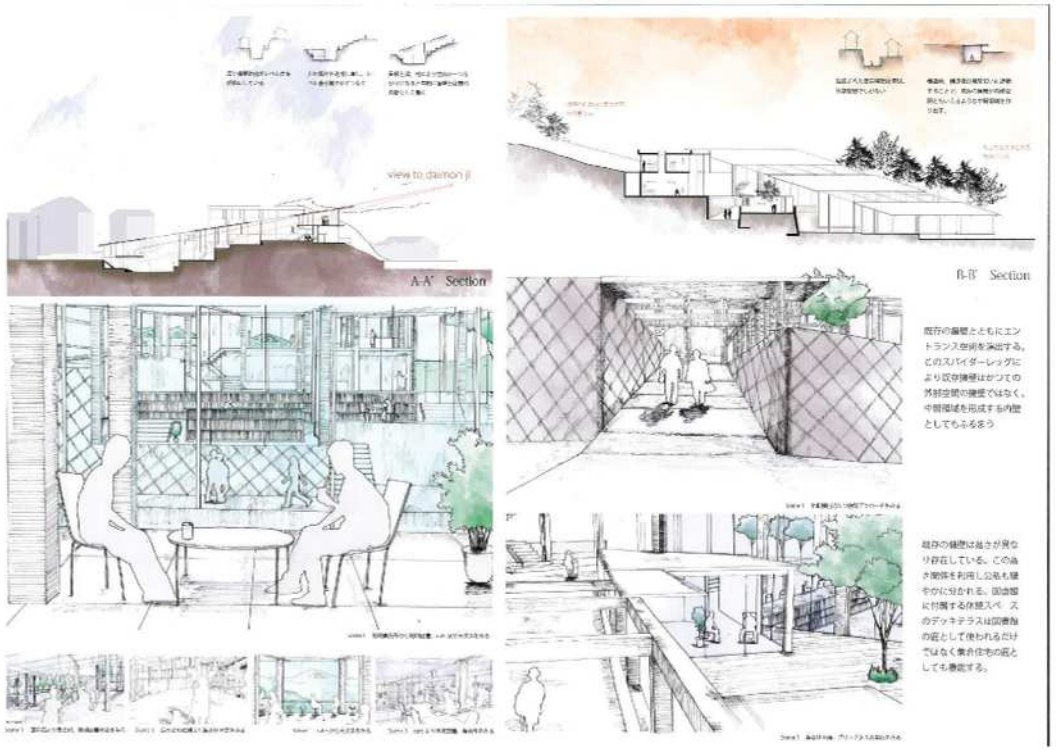
・研究の目的

現代の日の日、個々の建築がより自由なデザインであり変化に富む良好な景観を形成するための設計手法を得ることである。設計手法を得ることにより、毎日になり多様化してきた個々の建物のデザインの集合体である街並み、変化に富む良好なものとなる。効果できる可能性がある。良好な景観を形成することによるメリットとしては、地域の観光地化・経済効果による経済的効果や地域活性化も、地域の人が地域に対し愛着を持つ・愛着を持つことによる効果を守ろうとする積極的な活動ができると考える。

卒業論文では、個々の建築のデザインが自由であり変化に富んだ良好な景観を形成していると感じる、アムステルダムのボルネオ・スポレンブルクにある街並み景観を分析し、提案の中で参考にすることにより変化に富んだ良好な景観を形成できる可能性があるという結果に至っている。しかし、一般的な方法の分析では、個々の句の可能性までは書き表せたものの信憑性が薄いというのが私の中での反省点である。卒業設計において、連歌の手法を用いて個々の建築の設計を行ったが、一般的では、隣同士の関係を重視したものとどうかも信頼性がある。

修士論文では、東京銀座の中央通りを中心とした建物の中で、変化に富んだ良好な景観の提案を行う予定である。銀座中央通りを対象とした理由は、銀座のデザインルールにおいて中央通りは、個々建築が定められており建物のデザインの統一感が感じられていない。彩の東京にあたっているが、個々の建物が自由にデザインされると共通点が見出にくい傾向がある。全体で調和した景観であり、個々の建築が、個々の建物が違うことは問題ないと思うが、銀座での変化に富んだ良好な景観の形成を行うことにも個々の建築でも設計手法の信憑性が薄いと考える。研究段階の建築により可能性は、個々の建物





卒業設計のタイトルと概要

「壁地の編　～土木造成と建築の再考～」

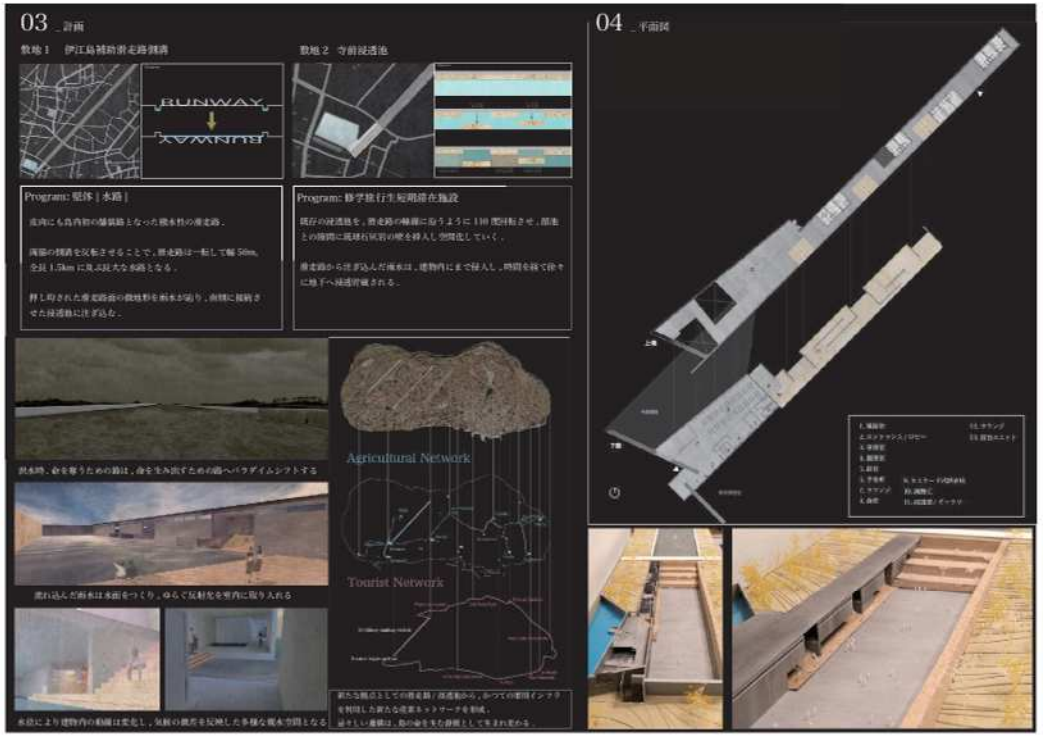
土木造成と建築をともに計画するとともに周囲の山や川などの自然環境との関係性を踏まえた計画をすることで敷地のポテンシャルを生かした風景を目指します。敷地は京都市左京区、白川河川沿い。土木造成で失われた親水空間を取り戻すとともに、東山大文字への眺望を生かした計画を行うことで周辺住民の憩いの場と住環境を提案します。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ　　：親水空間をもつ都市における人々の暮らしと土木建築の関係性

訪問予定の都市：オランダの都市ユトレヒト、アーメルスフォールート、ベルギーの都市ヘント

人々の生活と密接にある親水空間をもつ良い例として調査し、これからの日本の都市における親水空間のこれからを模索します。



第 10 回「街並みの美学トラベルスカラシップ」応募　研究旅行計画

佐々木 瞭 (東北大学大学院 五十嵐太郎研究室)

00 _卒業設計に通じた「街並み」の捉え方

私の「街並み」に対する考えは，大学入学後の 4 年間のなかで大きく変わっていきました。
2011 年，東日本大震災の直後に東北大学への入学を決めて仙台に住み始め，気仙沼や雄勝を始めとする被災地での復興活動に，建築家の方々に付いて参加していくなかで，ものをつくることに対する大きな無気力を感じました。それまでは設計の際，周囲のコンテクストを丁寧に汲み取って，景観に配慮し，自分のなかで建てるべきものを決定していました。しかし，津波で全てを流された街にはそのコンテクストが，「街並み」が無いのです。風景を書き換えていくことにためらいを感じ，かろうじてその街に残る真正なものをどうやってすくい取るべきか，その問いが自分を卒設へ向かわせました。

仙台市で建設に取り組んだ気仙沼市の被災時の様子

敷地に選んだ沖縄県伊江島は，戦争によって全てを焼き尽くされ，その後の軍事利用と基地化で地形の凹凸までをも失った島です。それでも島民は元の場所で生活を再開し，戦災から 70 年経った今は一見，そのような辛らい過去は想像もできないまでに復興を遂げています。
私の卒業設計は，徹底的に島の古い地図から街並みの変遷をリサーチすることから始まりました。日米両軍によって書き換えられ，再び積まれ始めた歴史のなかからかき分けるように島のオーセンティシティを見出すためです。
そして，いまの街並みのなかに過去と産業，すなわち過去と現在との分断をみつけました。それらが再び繋がることで，初めてこの島は復興を果たすのではないかと考えています。
新たに人の手によってつくられた街並みが美しくあるために，場所が持つ性格を多方面から把握することが，ものをつくる上でとても大事な姿勢だと考えています。

01 _「島」への関心

私は島という地理的特性に関心を持っています。島は周囲を海に囲まれており，外部とのアクセスは基本的に港を介した航路に限られています。その隔絶性から，島の集落は文化的・気候的な特色をその景観に多く残しており，距離の近い島同士でもその多様性は著しいものがあります。
離島は内地に比べ，文化的独自性の解像度が高いのです。
大学在籍時の 4 年間，私は瀬戸内，沖縄，九州地方を中心に国内の 20 以上の離島を旅行し，港と集落の関係性や，気候風土の景観への現れ方を観察してきました。
気候風土や文化，言語の違う異国の島同士を，そして国内の島々とを比較して，その立地特性が街並みへどのようにして現出しているのかをこの目で確かめたいと思っています。

02 _研究テーマ - アドリア海沿岸部島嶼群の都市 / 集落の比較研究

アドリア海沿岸部はその地政学的重要性から，各時代において支配者を変化させてきた．近代以降においては特に，二つの世界大戦やユーゴスラビア紛争でそのまちづくりに大きな変容を余儀なくされた経緯を持つ島も多い．このような外力を受け，島の街並みはどのような影響を受けてきたのか，或いは何が変わらず残っているのかをサーベイし，それらの比較を通じて「島」という地理的特性の一端を明らかにすることを目指す．

1. ダルマチア北部沿岸部

航路ルート [リエカ発]

1. クルク島　Krk

クロアチアの有人島のなかで最大面積，最大人口を誇る．1980 年，クロアチア本土との橋に総延 1,428m の橋が掛かり，陸路開通前から多くの観光客を惹きつける一大観光地となった．

2. ツレス島　Cres

イタリア北部対岸の 10 倍以上まで，オーバーヴァカンスの観光といった農業が衰退．ターキッシュ使用時代に農業地のために開かれた，海岸線を走る一本の道が全ての用地が繋がっている。

3. ラブ島　Rab

WWⅡまではイタリア・ファシスト政権によって観光開発が進められたことが知られる．かつてローマ帝国時代には自治を認められて繁栄した歴史を誇り，印象的な丘の文化遺産が残る．

2. ダルマチア中部沿岸部

航路ルート [スプリト発]

1. ブラチ島　Brač

白神話伝説，宝石採掘・ヴェネツィアの統治，ハンガリー王国，ハプスブルク君臨，センチ・オブ，オーストリア帝国，ユーゴスラビア自治とくらして育ってきた島で，WWⅡではイタリア，ドイツの占領に遭っている．20 年のクロアチア独立では観光客が戻り活気を取り戻しつつあり，現代率を中心に新々に立ち直りつつある。

2. フヴァル島　Hvar

アドリア海沿岸部島嶼群のなかでの最古の歴史を誇る．スタリー・グラード (Hvar Grad) を持つ，グレマイア古代の名ローマ人がつくり上げた，道路網の敷地を受けてきた，中世の街並みを今に残している。

3. コルチュラ島　Korčula

クロチ島とは対にし，1991 年からユーゴスラビアを占領した軍隊による戦争を受けた歴史を持つ．グレクラ・オリーブの栽培を基幹とする農業が盛衰を繰返したクロアチアのなかで唯一，観光地として近年は注目される島の一つである。

4. ヴィス島　Vis

WWⅡではユーゴスラビア抵抗運動の拠点の一つとなったこの島は，戦後ユーゴスラビア人民軍の主要軍事基地の一つになるなどした。クロアチア独立後にその立ち上がりを担ってられた，それらは自治機構として組織に再利用されており，その地域は伝統を誇る。

現在のヴィス島内に保存された空軍基地

卒業設計のタイトルと概要

タイトル:　Revivalscape -戦災70年後の伊江島再編計画-

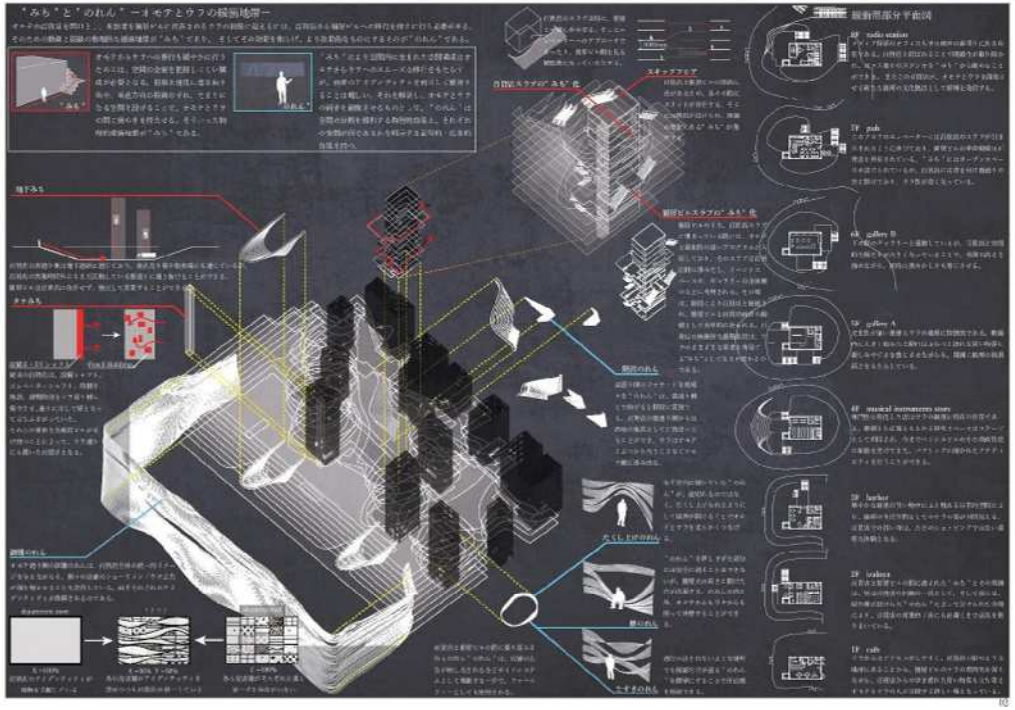
戦火と基地化によってその原風景を書き換えられた悲劇の島、伊江島を舞台に、設計の拠り所とすべきコンテクストとは、未来へ引き継ぐべき景観とは、そして場所のオーセンティシティとはなにかを問う。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

アドリア海沿岸部島嶼群の都市/集落
クロアチア・ダルマチア地方北部・中部の島々

アドリア海沿岸部の島嶼群はその地政学的重要性から各時代においてその支配者を変化させてきた。特に近代以降に起きた二つの大戦、ユーゴスラビア紛争によって島々が受けた外力は島の街並みにどのような影響を与えてきたのか、或いは何が変わらず残っているのかをサーベイし、それらの比較を通じて「まちづくり」と「街並み」の関係性を考える。

011



卒業設計のタイトルと概要

「Ginza Gataway —オモテとウラを紡ぐ百貨店—」

近年の再開発による大規模商業施設は、周辺の小規模店舗を危機に晒し、大資本に誘導された者ばかりが残る一元的な都市空間を作り出す。こうした一元化の波は銀座にも及び、松坂屋跡地で計画中の百貨店もその自己完結性ゆえに、歴史的街区構造が作り出した銀座のオモテ・ウラの関係を断絶させる巨大な壁となろうとしている。

本設計では、オモテの顔である百貨店にウラの雑居ビルを取り込み、百貨店の閉じた回遊性をウラに洩れ出させることで、銀座のオモテ・ウラという重層的な都市体験を案内する"門"を計画する。百貨店と雑居ビルの間には、共通の上下動線が設けられており両者を接合している。その動線によって雑居ビルのスラブは百貨店の方へと延長され、垂直性故に閉ざされていた雑居ビルの活動を百貨店側へ引き出していく。この両者の間の空間が緩衝帯となり、オモテからウラへの緩やかな移行を助けている。

百貨店と雑居ビルは共存共栄の関係を保ちながら、オモテ・ウラの世界を紡ぎ合わせていくのである。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

「欧米の大都市における表・裏通りの関係—日本的なオモテ・ウラとの比較から」

日本の銀座中央通りのような強力な表通りを有する都市において、表通りとその背後に控える裏通りの様相を調査する。調査対象都市はフランス・パリとアメリカ・ニューヨークである。各都市において、表・裏通りのファサード、土地利用、人々のふるまいなどを観察し、日本の都市と比較することによって、そのふたつの空間が織りなす構造を都市の特性として読み解くことを目的とする。この研究から、海外の都市における表・裏とはいかなるものかを把握するだけでなく、日本人の空間把握の枠組みや共通の文化を相対化して理解することができると考える。

012

建築がつくる風景 -山ノ内浄水場の仮設コンバージョンと解体プロセスの提案

京都工芸繊維大学大学院　木村明稔

計画対象は京都市の山ノ内浄水場。近年の水道事業の効率化から、山ノ内浄水場は廃止され、2013年から2014年にかけて解体されてしまった。約半世紀の間、京都市民の生活を支えてきた建物である。本来、複合施設、ポンプ棟は多手構造によって建物を強化し、柱の数を減らすことで、開放的な14本柱空間を設計している。高架水槽は地域を象徴する存在であり、まちのシンボルになっていた。このような建築遺産からなる山ノ内浄水場は機能的に優れた建築でありながら、増田友也の建築空間論に基づく造形であることから、モダニズム建築の系譜として専門家から高い評価を受けていた。

Problem

2013年、山ノ内浄水場が解体されてしまった。インフラ施設としての役目を終え、周囲の暮らしてこのまちの街並みをつくってきたこの建築を簡単に解体してしまっていた。建築の扱い方が適切なり、このまちの風景が崩壊していく。

Proposal

2015年、山ノ内浄水場がまだ存在しているものと仮定してこの計画を開始する。増田友也の思想を手掛かりに、山ノ内浄水場が「ものを見る目」の手助けになるための建築が必要であり、存在し続けることだけが建築のあり方ではないと考えた。風景をつくるための仮設として仮設建築による山ノ内浄水場の転設コンバージョン、その後の解体までのプロセスを提案する。

「風景というのは、私が言っている意味ではものを見る目です。ものを見る目をはぶっておいて、自然の風景だとか、なんの建築だとか、そういうことを言うべきではないと私は思うんです。一番壊されてしまっているのは目です。」

[illegible]

Site

京都市山ノ内浄水場は建築家増田友也によって設計され、1966年に竣工し、約半世紀の間、京都市民の生活を支えてきた建物である。本館、複合棟、ポンプ棟は多手構造によって建物を強化し、柱の数を減らすことで、開放的な14本柱空間を設計している。高架水槽は地域を象徴する存在であり、まちのシンボルになっていた。このような建築遺産からなる山ノ内浄水場は機能的に優れた建築でありながら、増田友也の建築空間論に基づく造形であることから、モダニズム建築の系譜として専門家から高い評価を受けていた。

Research

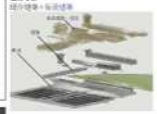
山ノ内浄水場のあるべき姿を考えるために、「増田友也著作集 I-V」を中心に、増田友也が何を求め、建築に何を託していたのかを追求した。

特に増田は建築が建築行為の人や周辺環境にどのような影響に考えを巡らせていたことがわかる。

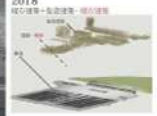
Process

2013

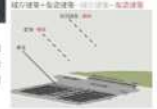
2015



2018



20XX



Project

2013

失われゆく風景の要 -山ノ内浄水場-

増田友也による建築的な造形の山ノ内浄水場はこのまちのシンボル的記憶地域や入びとに影響をうえ、風景の要となっていた。しかしあの水道施設であることから市民が直接この建築に関わることは少なく、建築としての価値が理解されにくい建物であった。

2015

山ノ内浄水場の仮設コンバージョン

丸太足場を建設することによって山ノ内浄水場に変化をうえる。空間を再構成された山ノ内浄水場は、足場による様々な回廊がつくられることで、「新しい空間」として人びとと密接関わり、人びとに新しく捉える建築へと変化する。そして使われることでこの建築の価値が認識される。

2018

山ノ内浄水場の解体

足場を残し、山ノ内浄水場を解体する。なくなってしまった建物の痕跡を残す始祖のような足場は、人びとに不安をうえる。そしてその後丸太足場も解体される。この仮設の空間体験の中で、大切なものが何かを考え、「ものを見る目＝風景」がつくられていく。

第10回「街並みの美学トラベルスカラシップ」応募　研究旅行計画書

京都工芸繊維大学大学院　木村明稔

研究テーマ　～「建築がつくる風景」についての研究～

卒業設計と学んだこと

私は卒業設計で、山ノ内浄水場を対象に建築の持つ価値を保存することをテーマにしました。この建築は2013年から解体されてしまうのですが、解体された後の街並みは、今までとは全く異なる殺しいものになってしまったと感じました。山ノ内浄水場は街並みを構成する風景の要になっていたと感じ、この計画を進めるにあたって、建築は街並みの重要な要素であることを再認識しました。街並みを考えるには建築は不可欠であり、その街にとってどのような存在であるべきなのかを考えるようになりました。

卒業設計では、増田友也さんの「風景とはものを見る目である」という思想を主な軸として、山ノ内浄水場を解体するプロセスの中で、建築による風景のつくり方を提案しました。

街並み調査の意義

私は、学部時代にしていたコンバージョン研究や、卒業設計のなかで建築の持つ周辺への影響や価値について興味を持つようになりました。建築は人びとや街並みに対して大きな影響を与えています。リノベーションやサステイナブルが重要なテーマとなる現代社会の建築分野において、建築をどのように扱うかということが一つの重要なテーマであると考えています。そしてこのような建築の価値や扱い方を学ぶために、私は建築の根本原理というものについて興味を持っています。そこで興味を持った建築家がアルヴァロ・シザです。彼は、建築に関する多くの要素を統合する際の秩序や思純さを重視しています。このような手法から彼の建築は構築的特性を持ち、建築の根本原理に関する手がかりが見つかるのではないかと考えております。またアルヴァロ・シザ事務所出身のエドゥアルド・ソウト・デ・モウラの建築にも興味を持っています。特に10年の歳月をかけて修道院をホテルへ転用したポウサーダは、保存活用の事例として非常に興味を持っています。

また私は、シザやモウラの建築はポルトガルという地域の特性を含んでいるように見え、このような建築のつくり方が街並みや風景にとって重要なテーマだと考えております。このような興味から私は修士論文においてもシザやモウラの建築や建築論に関するテーマを研究したいと考えており、彼らの建築に直接触れ、様々なことを学びたいと思っています。

街並みを考えるテーマ「風景をつくる建築の存在」

風景をつくる建築とはどういうものかをテーマとして、街並みを考えたいと思っています。このテーマに関して、芦原義信氏の「街並みの美学」の第-3「記憶にのこる空間」を一つの参照としました。一例としてパリの街並みにおけるエッフェル塔やノートルダムなどの存在が挙げられ、このようなランドマークが持つイメージアビリティーを高める効果が街並みの形成に大きな役割を担っているとされています。ポルトガルにおけるシザなどの建築がどれほどのランドマーク性を持っているかはわからないですが、少なくともこれらの建築の立ち振る舞いを見ると、どの建築も原風景になりうるような素材や形態が使われ、ポルトガルにしか見られないような建築であるのではないかと思っています。なぜ私がこのように感じているかはまだわかりませんが、実際にこれらの建築を見に行き、直接触れることで、この疑問を解消したいと思っています。そして、このような経験から風景をつくる建築を追求していきたいと考えています。

旅行計画

1.調査対象地へのアクセス方法

日本より空路でリスボンへ
（エコノミー国際・ドバイ経由・10~15万円）
リスボンを基点に鉄道で各地へ移動する。

2.調査予定

1-3日目：リスボン
4日目：セトゥーバル、エヴォラ
5日目：アヴェイロ、ポルト
6日目：ブラガ
7-9日目：ポルト
10日目：リスボン

3.調査地域と調査建築

ポルトガル人建築家
・アルヴァロ・シザ
・エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ
・ジョアン・ルイス・カリーリョ・ダ・グラサ
上記の3人の建築家による建築を中心にポルトガルの5都市を巡る。

4.主な調査対象建築事例

・ポウサーダ　サンタ・マリア・ド・ポウロ（設計：エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ）
元々は女子修道院であった建物を1987年より10年かけて改修された修道院ホテル。大規模なコンバージョンではなく、落ち着いた造形や、素朴な素材を用いることによって、元々の建築に調和するように改修することで、元々の建物の雰囲気を壊さないようにしている。

・リスボン万博ポルトガル館（設計：アルヴァロ・シザ）
幅58m×長さ65mの巨大な吊り屋根は、コンクリートであるにもかかわらず、重力に従うような柔らかい形をしている。この屋根は浮いているような感覚を与え、その下の広場に穏やかな空間を作り出した。シザの重視する要素である重力と光の操作を扱った建築である。

・キンタ・ダ・マラゲイラの集合住宅（設計：アルヴァロ・シザ）
エヴォラの城郭都市近郊にある集合住宅。約1200戸の大規模な低層集合住宅で上下水インフラ、店舗、教会、レストランなどを備え、ひとつの小さな街のような建物が統一感をもった街並みを形成しています。

Portugal- ポルトガル

卒業設計のタイトルと概要

タイトル：建築がつくる風景-山ノ内浄水場の仮設コンバージョンと解体プロセスの提案

計画対象は京都市の山ノ内浄水場。約半世紀の間、京都市民の生活を支えてきたこの建築が簡単に解体されてしまいました。山ノ内浄水場の設計者増田友也は、まちの「風景」を、人間の「ものを見る目」とし、建築が「ものを見る」をつくる手助けになるものと考えていました。本計画では、増田友也の思想を用いながら山ノ内浄水場を解体するプロセスにおいて人びとに「ものを見る目＝風景」を託す計画を提案します。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ：建築がつくる風景についての研究

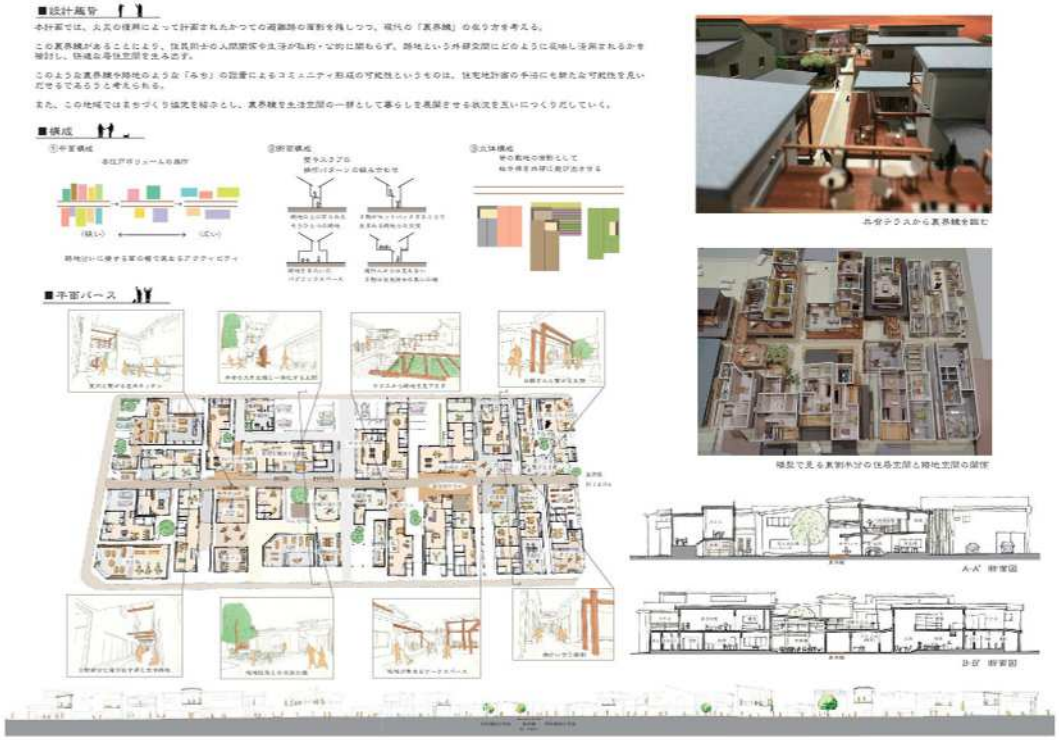
訪問予定国はポルトガル（リスボン、ポルト、セトゥーバル、エヴォラ、アヴェイロ、ブラガ）です。建築の根本原理への興味からポルトガルの建築に注目しました。アルヴァロ・シザ、エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ、カリーリョ・ダ・グラサの建築を中心に、彼らが目指すポルトガルという地域の特性を含んでいるような建築が街並みに対してどのような影響を与えているのかを学びたいと思っています。

013

■裏界線

■計画敷地の現状

■設計趣旨



路地と共に住まう ～路地と人との関係性～

木下 優奈

（1）研究旅行のテーマ
「路地と共に住まう～路地と人との関係性～」

■卒業設計で見つけた「課題」と「検討」

卒業研究では、火災の復興計画として設けられた狭い路地「裏界線」を対象とし、現在の裏界線への意識のされ方や実際の利用、あふれ出しを調査し、今後より快適に、また住民の生活の可能性を広げていく居住空間について考えて計画しました。

裏界線というのは、約60年前に飯田市で起きた大火の復興計画として、各住戸が背割り線に沿った部分を1mずつ出し合って作りあげられた避難路であり、建築基準法では各敷地に含まれるが、大部の道となっている為に建物は建てられないものとなっています。

この明確な目的と歴史のある裏界線は、現在そこに住む住民にとって単なる「ウラ」としての利用しかされていませんでした。

ですが、そこに様々な事柔や住戸の構成を少し操作することで、路地空間が住民にとって快適なものとなり、新しくコミュニティ生まれ、より豊かな生活が送れるのではないかと考えます。そして新たな裏界線の個性や魅力を引き出す事柔となっていくと考えます。

■研究旅行の内容

路地と人々の生活の関係性というのは裏界線だけではなく、どこの路地にもにじみ出ているものであり、そこにはそれぞれの路地特有の個性や活用のされ方があります。

それは国内の地域ごとに見ても、もちろん違いはありますが、文化の違う国ごとに色々な視点から見てみるのも、生活環境やまちの雰囲気、まちのルールなど、様々な点で違うところがあるので、とても興味深い路地空間と人々とのつながりを発見できるのではないかと思っています。

なので今回の研究旅行では、まちの個性がにじみ出す場所である路地空間に着目し生活の変化や文化、まちの雰囲気やルールでどのように路地空間の使われ方やあふれ出し、人々の暮らし方が変化をしていくのかを日本と比較しながら、路地空間のつくりだす豊かな生活やまちの風景について研究します。

大火の様子

大火後の飯田市

整備された裏界線

裏の延長としての利用

路地へのはみ出し

（2）訪問予定の外国の都市・街並み・建築物の内容

■モロッコ「フェズ」

フェズ旧市街地は城壁に囲まれた2.2km×1.2kmほどの地域で、自動車も入れない狭い路地が張り巡らされた迷宮都市です。

街には近代的な建物がほとんど存在せず、中世そのままのイスラム都市がいまも伝えられています。

市街地は露店や家も密集し、路地には生活があふれ、人と路地空間がとても親密に関係している地区であるといえます。

ここでは人々がどのように路地と接し、路地空間が生活にどのような影響を与えているのか、また人々にとって張り巡らされた路地がどのような存在であるのかを追い少さしながら視察します。

フェズの位置

露店があふれだし

奥行きのある路地

■イタリア「ベネチア」

水の都とも呼ばれるベネチア。ここも車は通れない狭い路地と運河が迷路のように張り巡らされたつくりとなっている歴史ある都市となっています。主な交通手段はゴンドラか徒歩で、裏路地は日本ではあり得ないほどの狭さのものばかりとなっています。

ベネチアは特に、水路と路地が人々の生活に密着している地域なので、水上の路地空間という観点からも人々がどのように接して生活をしているのかを調査をし、水と暮のつくりだす風景や生活の様子を日本と比較しながら研究していきます。

ベネチアの位置

生活のあふれだし

路地と水路

卒業設計のタイトルと概要

「裏界線と共に住まう」

昭和２２年４月２０日。飯田の町を８割も焼き尽くす大きな火災が起きた。晴天続きのための乾燥が災いし、木造の家々は次々に燃え、さらには風と地形の影響もあり瞬く間に手をつけられないような火の海が広がり、古くから残っていた飯田の城下町は消失した。

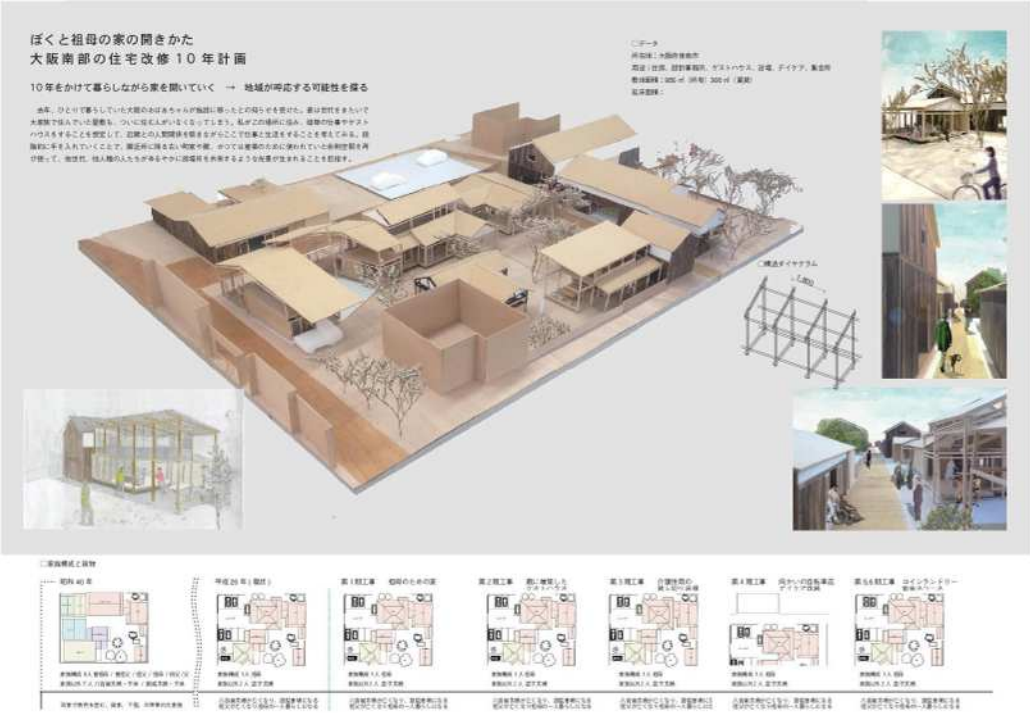
本計画では、火災の復興によって計画されたかつての避難路の面影を残しつつ、現代の「裏界線」の在り方を考える。この裏界線があることにより、住民同士の人間関係や生活が私的・公的に関わらず、路地という外部空間にどのように反映し活用されるかを検討し、快適な居住空間を生み出す。

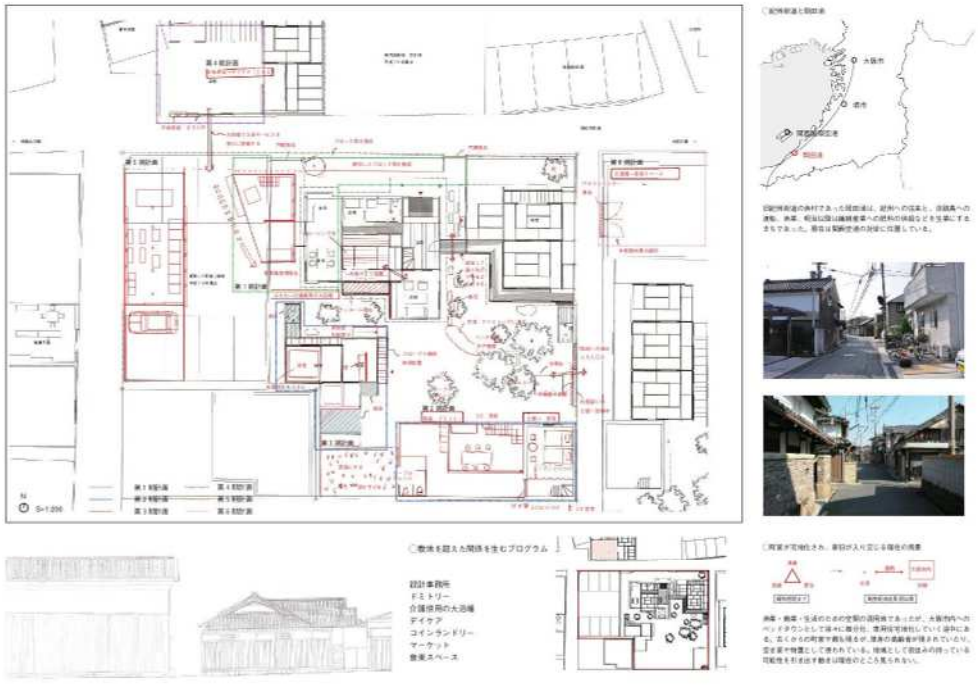
研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

「路地と人との関係」

訪問国：モロッコ（フェズ）、イタリア（ベネチア）

まちの個性がにじみ出す場所である「路地空間」に着目し、そこでの人々の暮らし方やもののあふれだしを調査し、路地がつくりだすまちの風景と住空間との関わり方を日本と比較しながら研究する。





第10回「街並みの美学トラベルスカラシップ」
研究旅行計画

成瀬 大志 （大阪市立大学大学院生活科学研究科）

1）テーマ「地域共同体における建築家の役割について」
ギオン・A・カミナダ氏の作品とスイスのフリン村の産業と集落

卒業設計のテーマから考える研究旅行

私の卒業設計は、築約100年の大阪南部の祖母の家に実際に自分が住みながら少しずつ改修を重ね、家と地域が少しずつ呼応するような生活を行うという内容です。この4月から学部生として過ごした横浜を離れ、大阪市立大学に進学し実際に泉南の祖母の家に住みながらこの構想を少しでも実現する手段を考えている最中です。
かつて岡田浦は、旧紀州街道の往来と漁船、漁業によって地域の共同体と景観が成り立っていました。現在も当時の商家の町家や蔵が景観をかたちづくっていますが、単身の高齢者が残されていたり、店を閉じ空き家や物置になり、ベッドタウン開発から徐々に専用住宅の戸建てに建て替えが進行している傾向があります。
景観は、単に美的な観点からのみ重要であるというわけではなく、暮らしと産業や商業など小さな共同体の経済活動が、同じような要望を持って制作してきたという結縁を調査して考える必要があると思います。卒業設計を進めていくなかで、地域の持続的な産業と景観を考える場に、そこに拠点を持った建築家が深く関わり続けることの必要性を感じはじめました。

そこでトラベルスカラシップの研究旅行では、「地域共同体における建築家の役割について」というテーマで地域に拠点を持った建築家が地域と向き合っている事例を実際に体感したいと考えました。そこで建築家ジョン・アントニ・カミナダ氏が出身で、現在も事務所を構えながら設計を行っているスイスのフリン村の暮らし方のサーベイを行います。地域共同体との関係のなかでの産業、観光業、生活のありかた、伝統的な景観に対しての新築の計画のされかたを分析します。

（2）訪問予定の外国の都市・街並み・建築物の内容
スイス/フリン村

建築家でスイス連邦工科大学の准教授であるギオン・アントニ・カミナダ氏はスイス中部の人口250人程度の小さなフリン村に生まれ、現在もこの地に生活しオフィスを構え働いています。1990年代から地域計画に関わり、フリンの地に9棟の建物を設計しています。カミナダ氏の活動は、住宅、農業用建築、発電安置所、木材加工所、製材所など地域の生活、産業に深く関わる建築物を住民との対話を重ねながら設計しています。設計する木造建築は、スイスの山間部で伐採製材され、地元大工の手仕事によって建てられます。

▲人口250人のフリン村の集落全景

▲体育館

▲電話ボックス

▲学園のための建物（角内知工所・製茶所）

▲死者のための建物（遺体安置所）

卒業設計のタイトルと概要

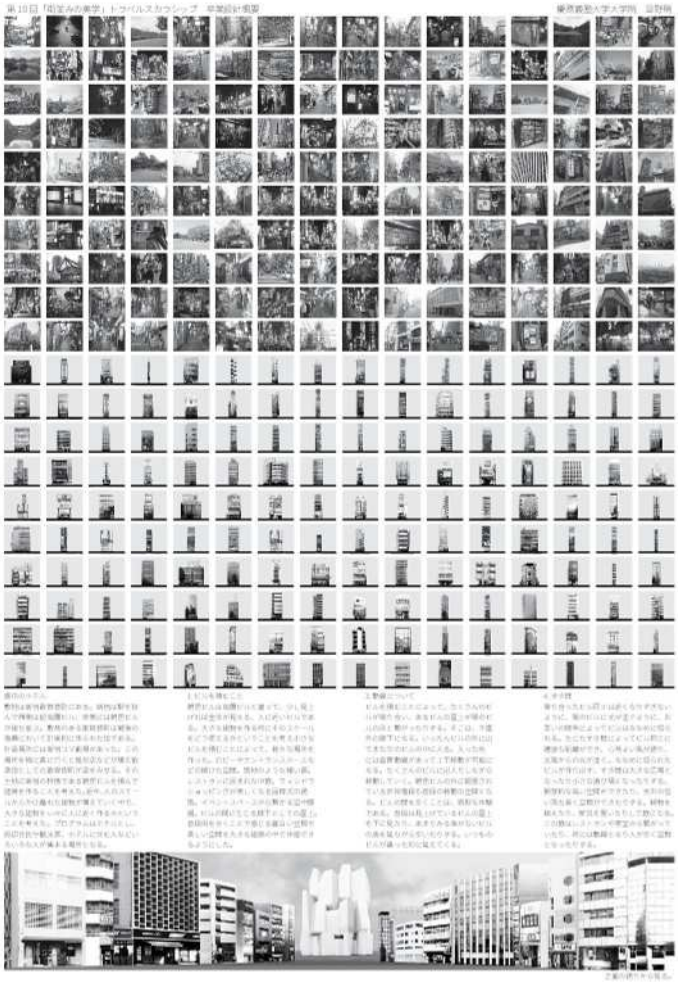
タイトル:「ぼくと祖母の家の開きかた -大阪南部の住宅改修１０年計画-」

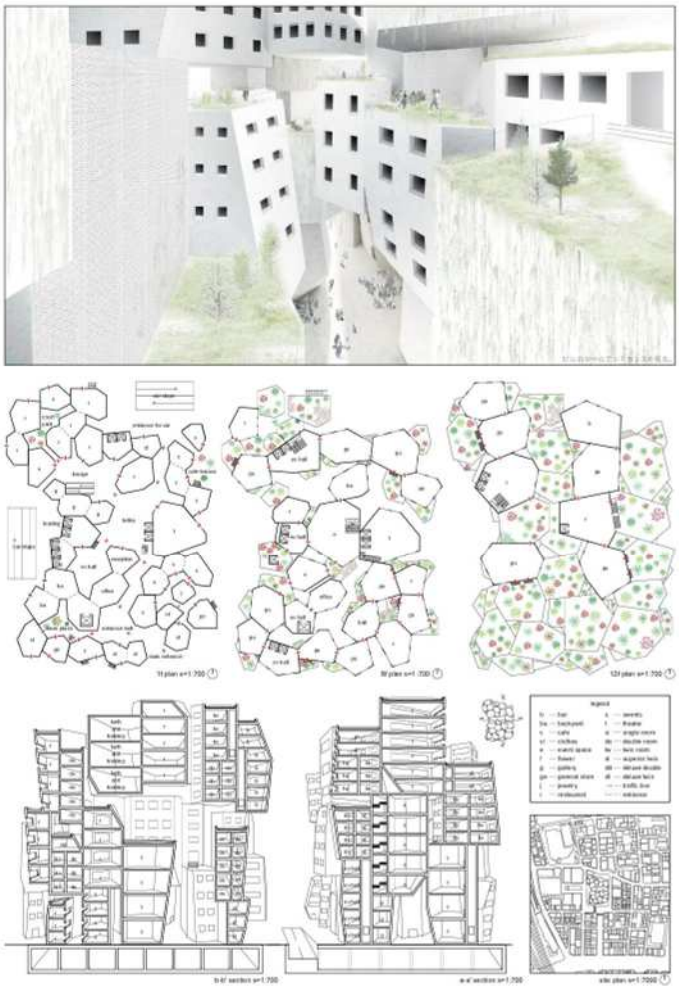
私の卒業設計は、築約100年の大阪南部の祖母の家に実際に自分が住みながら少しずつ改修を重ね、家と地域が少しずつ呼応するような生活を行うという内容です。大阪泉南の岡田浦はかつては漁業・商業・生活の混用地であったが、大阪市内へのベッドタウンとして徐々に細分化、専用住宅地化していく途中にあります。街並みは古くからの魅力的な町家や蔵が入り混じるものですが、単身の高齢者が残されていたり、空き家や物置となっています。自分の生活と仕事をする空間に段階的に手を入れていくことで、隣近所に残る古い町家や蔵、かつては産業のために使われていた余剰空間が土地の所有を超えて少しずつ動き出すことを考えています。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ:「地域共同体における建築家の役割について」
スイス/フリン村

地方の集落に拠点を持った建築家がその地域と向き合っている事例を実際に体感したいと考えました。建築家ジョン・アントニ・カミナダ氏が出身で、現在も事務所を構えながら設計を行っているスイスのフリン村の産業、観光業、生活のありかた、伝統的な景観に対しての新築の計画のされかたを分析します。





卒業設計のタイトルと概要

「都市のホテル」

近年、都心には高層ビルが増え、都市と人間と建物の関係が希薄化している。人は広い歩道を歩き、左右のビルや車道には無関心である。人はもっと自分の周りの環境を感じたり楽しんだりするべきである。新宿・歌舞伎町にはたくさんの雑居ビルが並んでいる。雑居ビルが作り出す都市と人間と建物の関係は面白い。エントランスに広がる空白、ビルの間の細い道、窓を開けて近くにある隣のビルの存在。このような関係に着目し、ビルを積み重ねることにより一つの大きな建築とした。プログラムはホテルとした。ホテルには、その土地の人、長期滞在する人、泊まりに来た人、それぞれが違った目的を持って集まってくる。ショップ、カフェ、結婚式場、温泉、小さな大きな客室などの様々な用途のビルができる。　ホテルの中を歩くことは、積み重なった都市の中を歩くことである。街を散歩するように建物のなかを散歩する。都市と人間と建物の間に新しい関係を作る。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ「都市と建物と人の関係」

訪問予定の国「イギリス、フランス」

日本の都市において都市を構成する要素として雑居ビルに注目した。卒業論文では、都市の中の歩行者専用路に着目し、人と都市の関係を生み出す仕掛けを調査した。これらを基に、イギリスやフランスの都市を訪れ、都市と建物と人の関わりを調査したいと考えた。